30P1-am124

理礼氏薬物学（第一巻）にみる薬物学の基本的立場

○林　優樹[1], 西野　ゆり[2], 菰田　綾佳[3], 森田　祐基[4], 西野　正雄[5], 宮本　如奈[6], 乾　真由美[7], 高倉　弘士[8], 畠山　有理[9]（[1]府立富田林高校, [2]府立長野高校, [3]府立藤井寺高校, [4]初芝富田林高校, [5]府立富田林高校, [6]同志社大学（文）, [7]大阪薬科大学（薬）, [8]立命館大学（産業社会）, [9]長崎大学（薬））

「 はじめに」・・明治五年に刊行された理礼氏薬物学はアメリカの戒施理礼著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。今回、ヤフーインターネットオークションにより入手した。本書の解釈本が見あたらなかったので、第一巻全文を解読し紹介する。

「方法及び結果」・・理礼氏薬物学は巻一が誘導編で、以下一六巻で収斂薬・強壮薬・衝動動脈薬と衝動神経薬・衝動脳髄薬・迷朦薬・衝動脊髄薬・鎮降動脈薬と鎮降神経薬・変質薬・吐薬・下薬・利尿薬・発汗薬・去痰薬・通経薬・発泡薬・引赤薬・腐蝕薬・緩和薬・潤滑薬・駆虫薬・制酸薬を取り扱っている。漢字とカタカナ、時にカタカナを付けた英語により表記されている。巻一の誘導編では薬物作用、薬物作用の条理、薬物作用に変換を起こす諸件、薬物施用の地位、薬物施用の形状、薬物衡量の表、薬物分類に法及表の七項目が取り扱われている。

「考察」・・薬物学の序文にあるように、全ての薬物を扱っていないが、初学者を対象とした、米国局方及び百列刺氏薬物全書に従い書かれた書物を備後福山の小林義直が翻訳したものである。薬物作用は健康体への効果と、続く遠隔作用により効果を発揮し、作用は神経系と血液系を介した２種あり、その作用に影響を与える因子に、植物の生育状況等の薬物自体の問題と、人体側の年齢・性差・粘液質か否か等を挙げている。１２歳以下の薬の用量は年齢に１２を加えた量を元に比例計算する方法を挙げている。また、薬物の作用発揮には想像力が大事で、医師及び薬への信頼が重要だとし、明治初年に導入された薬物に対する興味深い考えが示されている。又、薬剤を浸剤・煎剤・溶水・露水・混和剤・乳剤・粘剤・糖煉剤・蜜剤・酢剤・丁幾剤・酒剤・酢剤・散剤・丸剤・糖剤・舐剤・錠剤・越幾斯剤・軟膏・蝋膏・硬膏・糊剤等と分類する剤形の分類基準を挙げている。